

東海大学高等教育研究（北海道キャンパス）

第1号 2009年

目次

実践・調査報告

留学生による「絵本読み聞かせ」活動
—留学生・大学・地域との連携を目指して—

大山 隆子・橋本 弘美 . . . 1

留学生・日本人学生協働で行う演劇への取り組み
—イプセン演劇上演へ向けて—

橋本 弘美・大山 隆子 . . . 8

札幌校舎における学習相談室（英語）の利用に関する報告

増山 みどり・ロナルド・キブラー . . . 15

'09年度フィールドワーク「中国伝統文化及び現代社会考察」の報告

張 雷 . . . 36

留学生による「絵本読み聞かせ」活動

—留学生・大学・地域との連携を目指して—

Reading picture books to children by international students
---Aiming at the collaboration among the international students,
the university, and the regional community---

大山 隆子¹ 橋本 弘美¹
Takako Ohyama² Hiromi Hashimoto²

要旨

札幌キャンパス短期日本語集中コースでは、留学生、大学、地域の交流を目指し、北欧の留学生による「絵本読み聞かせ」の活動を2回実施した。1回目は当キャンパスにおいて公開講座の形で行い、2回目は、恵庭市教育委員会の協力のもと、恵庭市立図書館で実施した。本稿では、これらの活動についての報告を行う。

キーワード：留学生、日本語コース、絵本読み聞かせ、地域、交流

Keywords: International student, Japanese language course, Reading picture book to children, Regional community, Cultural exchange

1. はじめに

札幌キャンパスでは北欧交流の推進を目指し、スウェーデン、ノルウェー、フィンランドからの北欧留学生を対象に短期日本語集中コースを実施している。また、当キャンパスでは、「地域に貢献する」という方針を定め³、地域の人々や一般市民とともに、教育を深く考える交流の機会を持っている。短期留学生日本語コースにおいても、留学生、大学、地域との連携を目指し、留学生による「絵本読み聞かせ」活動を2007年6月札幌キャンパスにおいて公開講座の形で実施した。また、大学近隣の地域に止まらず、より広い地域への発信として、恵庭市教育委員会の協力のもと、同月、恵庭市立図書館でも「絵本読み聞かせ」活動を実施した⁴。この実践の概略は、学会で報告した(橋本他2008)。

2. これまでの背景

当キャンパスでは、北欧からの留学生が来ているということで、近隣の小、中、高校等から、

¹ 東海大学国際文化学部国際コミュニケーション学科, 005-8601 札幌市南区南沢5条1丁目1-1

² Department of International Communications, School of International Cultural Relation, Tokai University, 5-1-1 Minamisawa, Minami-ku, Sapporo 005-8601, Japan

³ 「座学を实践へと結びつける」を指針とし、積極的に大学の外に飛び出すフィールドワークや、地域活動への参加により地域に貢献できる人材を育てることを国際文化部の特色としてあげている(2010年度版東海大学GUIDE BOOK)。

⁴ 企画実施については当キャンパス国際文化学部教授川崎一彦氏と同教授吉村卓也氏の協力があった。

国際交流の時間を持ちたいという要望が多い。学校側からのプログラムは用意されたものがほとんどで、日本語コース側もそれらをそのまま受け入れてきた現状があった。

小、中、高校と、国際交流の時間を持つことは大変意味のあることである。また大学側も、地域とのつながりを積極的に推し進めている。ただその結果を見ると、留学生の交流に関しては、いわゆる「外国からのお客様」として扱われることが多い。できれば双方で協働⁵して何かを作り上げ、日本語コースとしても発信していきたい、という能動的な思いが募ってきていた。

3. なぜ「絵本読み聞かせ」なのか

「絵本」という手段を取り入れた理由は、前年度のプロジェクト（イプセン演劇上演への取り組み）の反省点に基づいている。2006年度に12名の留学生と演劇の上演を試みた。しかし、実施後の課題として、舞台に立てる留学生が全員ではなかったため、プロジェクトへの関わりかたに温度差があったこと、教師主導で行われたことなどがあった。その反省点に基づき、今回は、全員が活動に関われるものであること、また、学生が主導権を持って行うことができるような活動を目指した。その条件を満たすものとして考えたのが、「絵本の読み聞かせ」である。本学への留学生は、近年さまざまな分野で注目を集めている北欧の留学生が主流である。北欧といえば、子育て・教育が高い評価を得ている。北欧の絵本や童話の中では、「長くつ下のピッピ」「ムーミン」「アンデルセン」「ニルスの不思議な旅」など、私たち日本人に親しまれている作品も多い。そこで、読み聞かせを行う絵本は、彼らの国でよく親しまれているものにした。また、絵本の読み聞かせは、演劇の舞台に比べ、前に立つことにそれほど抵抗がなく全員が活動に参加できること、聞き手である子どもたちから直接反応が返ってくること、また絵本から独特の台詞、擬音語、擬態語、文末のスタイル、語彙など様々な表現を学ぶことができると考えた。今回は自国の絵本を留学生が日本語とスウェーデン語で読み、伝えるという活動で、本学日本語コースのプロジェクトとして行った。読み聞かせを行う対象者は、地域に住む子どもたちであり、この取り組みは、留学生・大学・地域のつながりを考える上でも、最適であると考えた。

4. 恵庭市立図書館との取り組み

札幌近郊にある恵庭市では、2003年度から月に一度、市内に住む外国人に依頼して、子どもに外国語の絵本を原語で読み聞かせる「BALLOON（バルーン）おはなし会」を実施している。そこで当大学の日本語コースでは、この活動に共感し、留学生の日本語にとっても効果があるのではないかと考え、恵庭市立図書館と協働でこの企画を進めた。これまでスウェーデン人の読み手はなく、初めて聞くスウェーデン語やスウェーデン人が話す日本語は、子どもたちにとってもいい体験になるだろうとのことであった。広い地域を視野におき、恵庭図書館に通ってくる人々との交流、および日本語教育としての発信を目的に、留学生による「絵本読み聞かせ」を実施することとした。

この取り組みは、恵庭市教育委員会主催のもとに行われ、スウェーデンの言葉や文化、風習等に触れ、子どもから大人まで物語の世界に浸りながら、楽しく国際理解を深める時間を提供するもの

⁵ 「協働(collaboration)」を互いに協力して何かをつくりあげる創造的な活動を行うこととし、そこではひとりではなしえなかった創発が起きると考える。そして協働がおきることを目指した学習を「協働的学習」と呼ぶ(舘岡 2005 (p.96))。

である。従来の「外国からのお客様」であった留学生が、自ら出向き、地域と手をつなぎ、プロジェクトを行っていく初めての試みである。このプロジェクトのために、何度も恵庭市との打ち合わせを重ね、連携を深めてきた。

5. 活動の内容と過程

5-1. 活動を行った留学生

スウェーデン・ヨーテボリ大学からの留学生 12 (男子学生 7 名 / 女子学生 5 名) と、スウェーデン・ダーラナ大学からの男子学生 1 名の、合計 13 名である。留学生は、1 年間母国で日本語を勉強してきた。レベルは初中級である。

5-2. 準備活動とその過程

留学生には来日以前から、今回の日本語コースでの「絵本で学ぶ日本語」の授業内容を伝え、Eメールにて連絡を取り合っていた。留学生には事前に、スウェーデンの有名な絵本や子どもの頃に慣れ親しんだ絵本を 1 人 1 冊から 2 冊、持ってきてもらうよう依頼した。

来日後の日本語コースの授業では、9 週間⁶の日本語コースの中に、週 1 回 90 分、計 8 回、絵本読み聞かせのための準備クラスを設けた。教室は日本語の授業を行っていたいつもの教室とは異なる広い教室で行い、床に数枚の毛布などを敷き、靴を脱ぎ、全員が車座になれるよう、絵本を読むのに適したリラックスした空間を作った。



図 1 教室での練習の様子

8 回分の具体的な授業の流れと、本番は以下の通りである。

【1 回目】

「絵本読み聞かせ」準備クラスの 1 回目は、日本語教師 2 名がそれぞれ好きな絵本を持ち寄り、留学生に子どもの気分を味わってもらいながら、絵本の世界へといざなった。留学生にとっては初めての体験になった。

その後、留学生が母国から持ち寄った絵本を全員で検討しながら、読み聞かせの本を決定し

⁶ 一週間の授業は、90 分×10 コマであり、そのうちの 1 コマを絵本読み聞かせのための準備クラスに当てた。

た。選考基準としては、日本語で書かれた同じ絵本があるもの、13人が関われるように13ページ以上ある本とした。選んだ絵本のタイトルは、エリサ・ベスコフ作『ブルーベリーもりでのプッテのぼうけん⁷』(全16ページ)である。その絵本で、まず教師は模範読みを行った。彼らのスウェーデン語の絵本が日本語で読み語られるのを、留学生は興味深そうに、そして真剣に聴き入っていた。

【2回目】

前回同様、教室には、毛布を敷き、靴を脱ぎ、リラックスして、前回選んだ絵本のスウェーデン語の意味を確認するために、1人がスウェーデン語のページを読み、それに続いてもう1人が日本語の同じページを読んでいった。全員が車座になり、絵本を回して読んだ。

【3回目】

日本語版16ページ、スウェーデン語版16ページ、計32ページのを、最初に日本語版で1ページ読み、次に、聞いている子どもたちにスウェーデン語のリズム・言葉を知ってもらうため、スウェーデン語で同じページを読むことにした。留学生の希望をとり、自分の読むページを決めた。

【4回目】

毛布の上に仰向けになって寝てもらい、目を閉じてリラックスした状態を作ってもらった。そして、教師が読み上げる本文に重ねるように読むシャドーイングを行った。日本語のリズム、イントネーションを体で味わってもらうことを目的とした。台詞の部分なども、声色を変えるなど表現豊かに読む感覚も掴んでもらった。その後、ペアになり、各自の分担ページを練習する。教師はそれぞれのグループを回り、イントネーションや言葉の意味などの確認を行った。

【5回目】

留学生は、子どもたちの視点や目線を意識し、絵本を持ち上げる高さや、本を持つ手の位置、椅子に座る位置なども、意見を出し合い、見せ方も検討した。練習も引き続き行った。

【6回目】

上記のような練習を引き続き行い、当日の「読み聞かせ」に与えられた45分間の配分について考えた。子どもたちの集中力を考え、読み聞かせのほかに、子どもたちに喜ばれそうな動きのある日本語の童謡、スウェーデンの童謡、手遊びなどをすることにした。

【7回目】

子どもたちが留学生の名前がわかるように、首から下げる大きな名札を作った。また、子どもを引き付けるような導入、挨拶、自己紹介、手遊び、歌の説明、日本語の歌詞、お礼の言葉などを考えた。

⁷ エリサ・ベスコフ作・絵(1977)、本には「読んであげるなら4才から。じぶんで読むなら小学校初級から」とある。

【8回目】

時間を計り、本番同様のリハーサルを行った。

6. 実施内容と結果

6-1. 北海道東海大学（旧）公開講座

2007年6月2日（土）、北海道東海大学（旧）のキャンパスにおいて、「北欧の子育てと教育&絵本読み聞かせ」というテーマの公開講座形式で実施された。時間は14時から15時半まで行われた。講座は2部構成になっており、I部では、川崎一彦教授（国際文化学部教授）、リレモル夫妻による「スウェーデンの子育てと教育」というテーマで講演を45分、この間、子どもたちには隣の教室で託児⁸がなされた。後半II部では、講演を聞いていた大人と託児を受けていた子どもが読み聞かせの教室に集まり、スウェーデン語と日本語で「留学生による絵本読み聞かせ」が行われた。終了後は留学生が練習したスウェーデンの手遊び、歌も披露された。I部、II部と託児は、すべて無料で実施した。

参加者は、大人36名、子ども20名（2歳から小学校低学年）であった。参加者の中には、外国人が日本語を話すのをはじめて聞く子どもたちや親もいた。講座終了後は、留学生が日本語で子供たちとの時間をもち、地域の中に自然と溶け込んでいたようであった。ある留学生は「6歳の女の子がずっと、自分の手を握ってくれた」と話し、「小さなお友だちができた」と喜んでいて。その後、参加者からも家に招待されるなど、いくつかの機会に発展していった。



図2 公開講座での子ども達との交流の様子)

6-2. 恵庭市立図書館「長くつ下のピッピの国のお話会～スウェーデン留学生による読み語り」

2007年6月13日、恵庭市立図書館、視聴覚室において、「長くつ下のピッピの国のお話会～スウェーデン留学生による読み語り」と題した「絵本読み聞かせ」を日本語とスウェーデン語

⁸ 託児は東海大学札幌キャンパス教授吉村卓也氏の協力で、託児グループ「ぐるんぱ」に委託。

で行った。また、留学生がアイデアを出し合ったスウェーデンの童謡、手遊びなども子どもたちと行った。参加者は親子連れや市民など約 50 人が参加した。子どもたちは、初めて会うスウェーデン人を、興味深く見つけ、読み聞かせを熱心に聞き入っていた。終了後、参加者からは、「国の名前だけは知っていたが、留学生に会い、スウェーデンが身近になり好きになった」との声が聞けた。イベント終了後も留学生との記念撮影や親交を深める参加者の姿が見られた。

7. 得られた効果および考察

今回のこの取り組みは、地域と連携を取りながら、一つのプロジェクトを進めた達成感があったと思われる。絵本という媒体を通して、子どもたちは、留学生が一生懸命に語る日本語に聞き入った。また北海道の人々にとっては、あまり馴染みのなかった北欧の絵本や文化を知ってもらう機会にもなったと言えるだろう。

そして、日本語を学ぶ留学生にとっては、日本語のクラスにとどまっているだけではなく、大学から離れた地域にも出て、実際にいろいろな年代の日本人と交流し、日本語を話すのにも自信を深めたと考える。具体的には、「日本語での挨拶、絵本や歌の説明、主となる絵本に関する日本語、子供たちの日本語などが勉強になった」との声が聞かれた。また、前回の活動の課題であった、留学生が積極的に構成内容を考え学習者主導に進められた点、留学生全員がステージに立てた点も評価できると考える。

今回の活動は、一方的に用意された「外国からのお客様」のスケジュールをこなしたのではなく、留学生、大学、地域で意見を出し合い、打ち合わせを重ねた成果であると言えるだろう。

具体的な実践の内容等には、色々な課題や反省点も残ったが、日本語教室から地域に発信していったという取り組みそのものは評価できると考える。

この実践を通して、この活動の中心になった留学生、絵本読み聞かせに参加した地域の子どもたち、その両親も、それまであまり接点のなかった留学生や彼らの国に対して関心を深めたと思える。また、この活動は、新聞報道⁹・メディア関連を通し、大学の PR にもつながった。なお、この取り組みは、読書コミュニティー主催の『第 3 回読み聞かせボランティア大賞』の「奨励賞」¹⁰を受賞することができた。

8. 今後に向けて

今回の「絵本読み聞かせ」では、スウェーデン語と日本語が同時に聞けるという利点はあったものの、同時に難しさも感じた。参加者からは、「絵本が少し長すぎて、子どもの集中力が保てなかった」などの声もあり、どのような絵本が読み聞かせに適しているのか、読み方の方法などについて、より深い知識も求められるのではないだろうか。今後検討を重ねていくことが必要であると思われる。

留学生・大学・地域との連携を目指し、絵本読み聞かせを軸に活動を行ってみたが、反響が

⁹ 北海道新聞千歳・恵庭版 2007 年（平成 19 年）6 月 15 日掲載、千歳民報 2007 年 6 月 14 日掲載、千歳・恵庭エリアの生活情報誌「chanto」2007 年 6 月 29 日第 44 号掲載。

¹⁰ 第 3 回読み聞かせボランティア大賞（平成 19 年 7 月 20 日）読書コミュニティーネットワーク主催・一般の部、奨励賞受賞「北欧からきた留学生の絵本読み聞かせ」。

大きく、さらなる活動への自信となった。日本語教育も、教室だけではなく、大学を巻き込み、地域と連携しながら外に向かって実践していくことの重要性を再認識した。今後はさらに新しい取り組みも視野に入れていきたい。

参考文献

- エリサ・ベスコフ作・絵, おのでらゆりこ訳 (1977), 『ブルーベリーもりでのプッテのぼうけんー世界傑作絵本シリーズ・スウェーデンの本ー』, 福音館書店
- 舘岡洋子 (2005), 『ひとりで読むことからピアリーディング』 東海大学出版会, 94-105
- 橋本弘美, 大山隆子 (2008), 「留学生・大学・地域との関連を目指した日本語コース実践授業ー「絵本読み聞かせ」への取り組みー」, 『「実践研究からの発信ー記述・分析そして共有へー教育現場からの日本語教育実践研究フォーラム」予稿集』, 日本語教育学会, 19-22

(受付：2009年8月28日, 受理：2009年10月6日)

留学生・日本人学生協働で行う演劇への取り組み

ーイブセン演劇上演へ向けてー

An action on the drama where international exchange students and Japanese students perform in collaboration
-For Ibsen drama presentation -

橋本 弘美¹ 大山 隆子¹
Hiromi Hashimoto² Takako Ohyama²

要 旨

札幌キャンパスでは主に北欧諸国及びロシアからの留学生を受け入れ、約3ヶ月間の日本語集中研修を行っている。2006年はノルウェーの近代劇の父、ヘンリック・イブセンの没後100年の記念の年であり、北欧交流推進を目指している本学でもこの年を祝おうという運びとなった。また、本学の短期留学生と日本人学生の交流がそれほど盛んに行われていなかったため、日本人学生に呼びかけ、希望者を募り、留学生と共にイブセン劇の上演を行うことにした。

具体的には15週間の日本語コースの中に、演劇上演のための準備クラスを設け、演劇指導の教師、日本語指導の教師、アクター、プロンプター役の留学生、および日本人学生とで共に準備、上演をした。この劇を通して、留学生は日本語を話すのに自信を深め、また日本人学生からも、留学生と協働で行った作業はこれからの自信になっていくとの声が聞かれた。今後も、留学生と日本人学生が協働で作上げられるような活動を進めていきたい。この実践の概略は、学会で報告した(大山他2007)。

キーワード：留学生と日本人学生、協働活動、演劇、ヘンリック・イブセン、実践報告

Keywords: International exchange students and Japanese students, Collaboration activity, Drama, Henrik Ibsen, Practice report

1. はじめに

東海大学札幌キャンパスでは、スウェーデン、ノルウェー、フィンランドからの北欧諸国及びロシア極東地域からの留学生を受け入れ、約3ヶ月間の日本語集中研修を行っている。留学生は学内に隣接された国際交流会館と呼ばれる寮に滞在し、日本語クラスに参加している。この国際交流会館の2階に日本語クラスの教室があり、3階が彼らの住む寮であるため、留学生は授業が終わるとすぐに寮に戻ってしまい、学内を歩いたり日本人学生と積極的に交流したりする姿よりも、留学生同士の行動が多く見受けられる。本学が目指す学生間交流は、一部ク

¹ 東海大学国際文化学部国際コミュニケーション学科, 005-8601 札幌市南区南沢5条1丁目1-1

² Department of International Communications, School of International Cultural Relation, Tokai University, 5-1-1-1 Minamisawa, Minami-ku, Sapporo 005-8601, Japan

ラブ参加者間ではあるものの、学内全体を見るとそれほど活発に交流が行われているとはいえない。そこで、日本語習得のみならず、留学生と本学日本人学生とが時間を共にし、協働³で取り組める活動を考えた。その試みのひとつとして日本語でイブセン演劇を企画し、上演することとした。

本稿は、留学生・日本人学生が協働で作上げたイブセン演劇上演までの実践報告である。

2. なぜイブセン演劇なのか

この企画を考えた2006年は、「近代劇の父」と称されるノルウェーの劇作家ヘンリック・イブセン(1828 - 1906)の没後100年に当たる年だった。ノルウェー文化省は、2006年を「イブセン・イヤー」と定め、ノルウェー及び日本を含む海外でイベントをし、世界各国で記念すべきこの年を祝うことを決定した。(駐日ノルウェー王国大使館(2006))特に2006年秋学期は、ノルウェーからの短期留学生を受け入れていたこともあり、当大学でも、この記念すべき年を祝おうということになった。そこで留学生と本学日本人学生に呼びかけ、協働でイブセン演劇を上演するプロジェクトを立ち上げることにした。(以下イブセン演劇プロジェクトと呼ぶ)。上演当日は、ノルウェー参事官も伝統衣装であるブナードを着て、観劇にお越しいただけることが早い時点で決まっていた。上演劇は、「人形の家」「ペール・ギュント」「ヘッダガブラー」など有名なイブセン作品に目を通し、学生の話し合いの中から、また参加者の人数も考えて、家庭劇である「野がも⁴」に決定した。50分という限られた時間で「野がも」第2幕を前半と後半に分けダブルキャストで、すべて日本語で上演する運びとなった。

3. 実施内容

3-1. 目的

本学が推進している北欧交流の一環として、この記念すべき2006年イブセン・イヤーを盛り上げるため劇の上演を取り入れ、留学生・日本人学生との協働作業を目指すことを目的とした。

3-2. 対象者及び関わった人

2006年秋学期ノルウェー・オスロ大学からの留学生11名(男子学生5名/女子学生6名)と、スウェーデン・ダーラナ大学からの男子学生1名の、合計12名である。ノルウェーからの留学生は、1年間母国で日本語を勉強してきた。レベルは初中級で、全員が初めての来日である。演劇の経験は全員、まったく無しとのことだった。

³ 「協働(collaboration)」を互いに協力して何かをつくりあげる創造的な活動を行うこととし、ここではひとりではなしえなかった創発が起きると考える。そして協働がおきることを目指した学習を「協働的学習」と呼ぶ。(舘岡 2005 (p.96))

⁴ 『野がも』あらすじ:

写真屋を営む夫婦ヤルマールとギーナ、その愛娘であるヘドヴィックと、ヤルマールの父老エクダル。この慎ましく平和な家庭に、ある日、ヤルマールの親友であり豪商ヴェルレ氏の息子であるグレーゲルスが尋ねてくる。どこかほの暗い正義感を胸に抱いているグレーゲルスは、自分の父親とギーナが過去に関係を持ち、その結果生まれた子どもがヘドヴィックだという秘密を知り、それをヤルマールに伝え、自分の正義を貫こうと考えていた。自らの正義を貫くことが正しいことになるのか。この疑問を投げかける鍵となるのが「野がも」とそれを引き上げてくる「獵犬」である。今回上演した第2幕は、その2つの鍵である「野がも」と「獵犬」、つまり隠された秘密と、それを暴こうとするグレーゲルスが登場し、波紋を招く場面である。

本学からは希望者を募り、日本人学生 11 名が参加した。(男子学生 3 名/女子学生 8 名) また教員は、演劇指導として本学札幌教養教育センター増山みどり先生、日本語指導の大山、橋本の 3 名で行った。

3-3. 練習時間

このイプセン演劇プロジェクトでは、15 週間の短期留学生日本語プログラムの中に週 1 回 90 分、演劇上演へ向けた準備クラスを設けた。この時間では、台本の読み方、言葉の意味、言い回しなどの練習を、ペアやグループなどで行った。また、週 1 回放課後(水曜日 4 時限目終了時)にも時間をとり、このときは、留学生、日本人学生、教員が集合し、大教室を借りて、台本の読み合わせ、立ち稽古などの合同練習を行った。表 1 のように役割分担を行った。

表 1 役割分担

グループ	配役	アクター	プロンプター	サポーター
グループ 1 (前半)	ヤルマール	留学生① (M)	留学生⑤ (M)	日本人女子学生 F
	ギーナ	日本人女子学生 A	留学生⑥ (F)	日本人女子学生 G
	ヘドヴィク	留学生② (F)	留学生⑦ (F)	日本人女子学生 H
	老エクダル	日本人男子学生 B	留学生⑧ (M)	
グループ 2 (後半)	ヤルマール	留学生③ (M)	留学生⑨ (M)	日本人女子学生 I
	ギーナ	留学生④ (F)	留学生⑩ (F)	日本人男子学生 J
	ヘドヴィク	日本人女子学生 C	留学生⑪ (F)	日本人女子学生 K
	老エクダル	日本人女子学生 D		
	グレーゲルス	日本人男子学生 E	留学生⑫ (M)	日本人女子学生 L

3-4. 役割分担

イプセン演劇プロジェクトを始めるに当たり、活動内容の説明等を行ったが、留学生 12 名のうち、「舞台に立ちたい」と述べた者、また恥ずかしい、日本語に自信がない等の理由で「舞台には立ちたくない」と述べた者でちょうど半々に分かれた。アクターの人数の関係もあったため、舞台に立つことを希望する人には、日本人学生も交えてオーディションを行い、役を決めた。留学生は 4 名(男子学生 2 名/女子学生 2 名)がアクターに選ばれた。また、舞台に立ちたくないと言った人たちも、何らかの形で演劇に関われるように、『プロンプター』を作った。プロンプターとは、常時舞台袖に立ち、アクターが台詞を忘れてしまったときにそれを教える黒子的な役目である。日本人学生には、アクターに加え、留学生に日本語の意味や発音などを教えるサポーターについてもらった。授業時にはカバーできなかったところも、この合同演習のとき、日本人学生から教えてもらえるような体制にし、アクター・プロンプター・サポーター三人四脚で練習を行う。つまり、一つの配役に対して、最低 3 名が責任を持って関わるという連携の形である。プロンプターの留学生には、当日の司会進行役も務めてもらった。役割を表にすると表 1 のようになる。

3-5. 上演までのスケジュール

表2のように、第一回目の練習は、本番の約2ヶ月前、立ち稽古は約1ヶ月前、前日リハーサル、そして本番は12月14日であった。

『野がも』第二幕を、一部と二部に分け、それぞれダブルキャストで上演した。

表2 スケジュール

打ち合わせ回数	日付	練習内容
1	10月2日	準備・今後のスケジュールについて(オリエンテーション)
2	10月11日	オーディション(翌日に役を決定)
3	10月18日	ペア練習・発音指導
4	10月25日	グループ練習・発音指導
5	11月8日	全体通し練習
6	11月15日	全体通し練習
7	11月22日	舞台に立ち稽古(プロンプターつき)
8	11月29日	舞台に立ち稽古(プロンプターつき)
9	12月1日	大道具貸し出し・移動他
10	12月6日	ポスター作成・掲示・衣装決定・舞台に立ち稽古(プロンプターつき)
11	12月7日	グループ練習・舞台に立ち稽古(プロンプターつき)
12	12月8日	舞台に立ち稽古『WebCity札幌』に原稿アップ・冒頭の挨拶・司会の練習
13	12月13日	リハーサル・配布しおり印刷・アンケート印刷
上演当日	12月14日	17:00よりN601教室にて本番



図1 イプセン演劇プロジェクトの合同練習で、日本人学生と台詞の読み合わせを練習する留学生

留学生はこのような練習のほか学内にポスターを作り、掲示をした。またこのイプセン演劇プロジェクトのことを、インターネットの記事や地元紙に取り上げてもらうなど、事前に広報活動も行った。



図 2 立ち稽古で練習する留学生たち

4. 結果

4-1. 観客の声

2006年12月14日イプセン演劇「野がも」を上演。地域の人にも大学の取り組みを理解してほしいと一般公開とし、上演後は観客およそ60名からの大きな拍手があった。

上演後に行った意見・感想シートでは、次のような声が聞かれた。

- ・とても面白かったです。留学生の真剣な顔を見たとき、この劇への強い気持ちが伝わりました。留学生にとって日本語での台詞というのはとても難しいことだったと思いますが、日本語の上達にはとても良い手段だったのかもしれない。
- ・今回のイプセン劇はとても良かったと思います。出演者のみなさんもとても一生懸命やっている姿が印象的です。たださえ留学生のみなさんは母国語ではない言葉話すことは難しいことなのに、それを劇として発表し、人を楽しませることは素晴らしいことだと感じました。
- ・留学生の日本語が明瞭でよく分かりました。よく練習したと感心しました。共同で何かをすることが学生には良い思い出になると思いました。
- ・日本人学生との息もピッタリだったし、とても良かったです。皆で作上げたんだなあというのがよく分かりました。

これらの声からもわかるように、短期間であれだけの日本語を覚えることができたことへの感嘆、彼らの努力を讃える声、もっと続きを見たかった等、肯定的な感想がたくさん書き込まれていた。また、この年にイプセン劇を上演した大学は、日本では唯一だったとのことで、ノルウェー参事官も当大学の取り組みを高く評価してくださった。

4-2. 留学生の声

上演後の留学生へのインタビューでは、全体的に日本語学習の上で役に立ったとの意見が多かった。例えば、今までは、日本語で話すことに消極的だったが、演劇でたくさん練習をしたので、大きな声で自信を持って話すことができるようになった、また日本人に質問することに抵抗がなくなった等である。これらは舞台上に立ったアクターからの声である。

一方プロンプターも、初めのうちはアクターと共に台詞を覚え影の役者として活躍し、二人三脚でやっている感覚が強かったが、後半に入りアクターが完全に台詞を覚えてしまうと、自

分の必要性が薄くなっていくように感じられ、時間を持て余してしまったとの意見があった。プロンプターとしてアクターにずっとついていっているのではなく、時間をうまく配分して衣装や小道具の作成に関わりたかったとの声が聞かれた。

4.3. 日本人学生の声

日本人学生にとっても、あまり話す機会のなかった留学生と身近に接する機会が増えたため、共に協働で行った活動は今後の自信になっていく、毎回の練習を重ねていきながら、留学生と仲間になれたと感じているとの声が聞かれた。

5. 考察

以上、2006年秋学期にイプセン劇の上演を取り入れ、留学生・日本人学生との協働作業を目指した。留学生はこの練習・実演を通し、日本語を話すのに自信を深めたと考える。日本人学生にとっても、あまり話す機会のなかった留学生と身近に接する機会が増えた点は評価できる。しかし、アクター以外の留学生にとっては、やや退屈な時間もあり、もっと彼らの個性が生かせるようにすべきであった。インタビューのときにも意見として聞かれた、道具、衣装などの担当を増やす工夫が必要だったろうと思われる。同じ時間を費やし同じ台詞を覚えたのに、片方は舞台に立ってスポットライトを浴び、片方は影の役割であったため、アクターへの羨望を感じ取れた。これは裏を返せば、練習を始める前の説明会で、恥ずかしい、日本語に自信がないと言い「舞台には立ちたくない」と述べた者たちが、アクターと共に練習をしていくことで、当初持っていた自分の枠組みを超え、自分も何かをしたい・自分もアクターをやれば良かったという気持ちや感情の変化である。したがって、プロンプター自身にもスポットライトが当たるような仕掛けや試みをしていくべきだったろう。そして、教師は、この彼らの心的変化も含め、動機付けを行っていく必要があると思われる。

この「演劇」という活動そのものが初めての試みであり、加えてイプセン演劇当日には、ノルウェー参事官もお越しいただくことがすでに決まっている状態からのスタートだったため、演劇を成功させなければならないという思いやプレッシャーが強く、教師側は留学生に難しく長い台詞を覚えてもらうことばかりに気をとられがちだった。そのためスケジュール管理等含め、どちらかという教師主導の割合が高かったように思われる。学生は、積極的に参加していないというわけではなかったが、もしかすると「やらされている／やらなくてはいけない」という感想を持った者もいたかもしれない。もっと彼らにイニシアティブをとってもらい、モチベーションを高めていく方法があったのではないだろうか。上演後のインタビューからも、役割分担、および協働活動の中にも個々人の個性を生かす場作りや仕掛けが必要であると考えた。具体的には教師側からの問いかけなども考えられる。問いかけ、引き出し、学生の意見や声を段階的に取り入れていけば、活動に対してもっと前向きに楽しく参加してもらえただろうと思われる。

6. 今後に向けて

今後は、学生の意見をもっと取り入れて、学生がその個性を生かし、自ら決定し、進めていけるような場を意識しながらプロジェクトを作り上げていきたい。

今回は、外国語を使って「演劇」をする点で、スタート時点からややハードルが高いと感じ

た留学生もいた。そのためプロンプターという役割を作り、影の役者になってもらい練習を重ねてきたが、イプセン演劇プロジェクトが終わってからの声から考察されるように、やはり、一人ひとりの個性を生かしつつ、全員がステージに立ち、発表ができ、達成感が得られるようなプロジェクトの可能性を考えていきたい。また、日本人学生との交流の場となるような協働活動も視野に入れ、大学全体を巻き込みながら、短期留学生受け入れプログラムを考えてきたいと思っている。

参考文献

- 駐日ノルウェー王国大使館 (2006), 『イプセンハンドブック』, 駐日ノルウェー王国大使館
館岡洋子 (2005), 『ひとりで読むことからピアリーディング』 東海大学出版会, 94-105
大山隆子, 橋本弘美 (2007), 「留学生・日本人学生協働で行う日本語コース実践授業－イプセン演劇上演への取り組み－」『「実践研究とは何か－私にとっての実践研究－教育現場からの日本語教育実践研究フォーラム」 予稿集』, 日本語教育学会, 31-34

(受付：2009年8月28日, 受理：2009年10月6日)

札幌校舎における学習相談室（英語）の利用に関する報告

A qualitative investigation and assessment of the status, trends and developmental potential of the English Study Help Room at Tokai University, Sapporo Campus

増山 みどり¹ ロナルド・キブラー¹
Midori Mashiyama² Ronald Kibler²

要 旨

2008年度の学習相談室（英語）の利用はほとんどないという状態であった。この報告ではアンケートや小プロジェクトを通してその状態を改善し、学習相談室（英語）の利用を促す試みを紹介している。大学入学一年目の学生を対象にしたアンケートの結果、学生の学習相談室（英語）の利用に対する意識が浮かび上がってきた。また前述のアンケート、クラス担当教員に対するアンケート、プロジェクトに参加した学生からの意見等に基づいてこの相談室をどう利用するかに関する提言を行う。

Abstract

In 2008 the level of student utilization of the English Study Help Room (ESHR) was low. This report outlines surveys and mini-projects carried out to increase awareness and student participation. Awareness of the ESHR was increased due to the surveys and visitations. Proposals for further improvement of the ESHR are made.

キーワード：自覚，学習動機，施設の活用，学習支援

Keywords: awareness, motivation, utilization, learning support

1. Introduction

Student Learning Centers can be an effective tool for supporting students' learning in the school context. For example, the authors are familiar with several successful learning centers such as the English Writing Center at Colorado State University, the Online Writing Lab (OWL) at Purdue University, and the Learning Center at State University of New York at Buffalo.

The need for this kind of support is becoming better understood in Japan, but

¹ 東海大学札幌教養教育センター，005-8601 札幌市南区南沢5条1丁目1-1

² Liberal Arts Education Center, Sapporo Campus, Tokai University, 5-1-1-1 Minamisawa, Minami-ku, Sapporo 005-8601, Japan

development of this kind of support is still not fully realized. This is also true of the English Study Help Room (ESHR), recently instituted at Tokai University, Sapporo Campus. In attempting to ascertain the overall nature of the ESHR it soon became clear that it was highly underutilized. One reason for this was that the ESHR program was not well known by either the faculty and the students.

This study showed that upon raising awareness of the ESHR both students and teachers expressed interests and need for such learning support.

2. Methodology

① Participants

The participants of this project are: 1) students who were taking English Communication classes in the fall semester of 2008 and the spring of 2009, 2) teachers who were assigned to teach these classes, and 3) the instructor who was assigned to stay in the ESHR and take care of the visiting students.

② Background of the English Study Help Room

The ESHR was opened in April, 2007. The instructor who is volunteering to take care of the ESHR is a retired professor who teaches English classes part-time. The location of the room is close to the cafeteria.

In April, 2008, one of the researchers for this project was assigned to monitor the room. It soon became clear that there were some problems. Most importantly, students were not visiting the room. To investigate the reasons for this, the first student survey was conducted in January, 2009.

Another purpose of this survey was to see if the students were ready to accept teaching assistants. It seemed that one of the problems was the availability of the instructor and the room. The research looked into the idea of solving this problem by using teaching assistants.

As a result of the survey, it was found that despite the fact that the room was mentioned during guidance at the beginning of each semester, almost half of the students did not know about the room when the survey was taken ten weeks later. Because of this in the spring semester of 2009, the room was promoted through several other channels. First it was mentioned in the student guidance in April. Then the schedule of the room was posted in each elevator and the student bulletin board in the hall. And each English teacher, distributed flyers to all their first-year students in May.

After that the researchers started planning to conduct two small projects based on

utilizing the ESHR. Each researcher designed one small project, namely the Kibler-project and the Mashiyama-project. The instructor of the room was approached and agreed to participate in the projects.

In early June, the survey for teachers were distributed and collected. As a result, 2 out of 4 Japanese English teachers and 5 native instructors answered the survey. We learned that none of the native instructors knew about the ESHR but most of the instructors, both native and non-native, welcomed the idea of such support.

The small projects started in the late June. Some students were asked to visit the room and meet the instructor. After that, a follow-up interview was conducted with the ESHR instructor on August 5th.

The second student survey was carried out between July 20th and 24th. Once again, the aim of the survey was to investigate the students' awareness of the room and their readiness to accept teaching assistants. All the English teachers who were assigned first year students' classes were asked to distribute the survey and collect it. Survey papers were collected for ten out of twelve classes. A total of 255 first year students answered the survey. In addition, selected classes with second, third, and fourth year students were also surveyed.

Therefore the data sources of this project are: (1) two student surveys, (2) a teacher survey, (3) consultation sheets for the Kibler-project, (4) the after-visitation survey for both projects, and (5) the recorded interview with the ESHR instructor.

3. Results

① Student Survey Project

As explained before, there were two student surveys conducted. The first student survey was distributed and collected at the end of the fall semester of 2008. In the first student survey, 144 first year students responded. Moreover some second, third and fourth year students also participated, bringing the total number of the participants of the first student survey to 185.

The second student survey was conducted in same fashion at the end of the spring semester of 2009. In the second student survey, 255 first year students answered the survey. As in the first survey also participated, bringing the total number to 306. The detailed numbers of the students are in Table 1.

There are nine questions and four sub-questions in the survey (Appendix A). The first and second questions are about the years and the departments the students are in. These two questions are for determining the sample. Third question is asking if they know about the room. The fourth question is if they have ever visited the room. If they answered yes, they are

asked to answer three sub-questions about their visits; how many times they visited, what they did, and if the visit helpful. If no, they are asked the reason they did not visit the room. Thus, Questions 3 and 4 are asking about the present situation (Table 2).

Table 1: Numbers of students answering survey 1 & 2

	Number of students (Survey1)	%	Number of students (Survey 2)	%
4 th year	2	1.1	4	1.3
3 rd year	10	5.4	5	1.6
2 nd year	29	15.7	42	13.7
1 st year	144	77.8	255	83.3
Total	185	100.0	306	100.0

Table 2: Q 3 “Do you know about the room?” and Q4 “Have you ever been there?”

	Survey 1	%	Survey 2	%
Y-Y	10	5.4	13	4.2
Y-N	94	50.8	150	49.0
N-N	79	42.7	142	46.4
No answer	2	1.1	1	0.3
Total	185	100.0	306	100.0

Y-Y = Yes, knew about the room and Yes, been there

Y-N = Yes, knew about the room but No, never been there

N-N = No, did not know about the room and No, never been there

About half of the students knew about the room, but most of them have never been to the room. Some interesting reasons they gave were “I thought I didn’t need to go there,” “I can study myself” and “(it is) rather difficult to go in (the room).”

From Question 5 to 9 are about their needs of the room. Question 5 asks if they want a teacher or a teaching assistant. Questions 6, 7, and 8 are about the time and days they want the room open, and the location of the room.

More than half of the participants agreed to have students as teaching assistants in the room. But when we analyze the data deeply, there emerges a tendency.

Table 3: Q5 “Who do you wish to have as instructors?”

	Survey 1 (n=185)	%	Survey 2 (n=306)	%
Student is okay	121	65.4	198	64.7
Prefer teacher	48	25.9	95	31.0
Both	3	1.6	2	0.7
No answer	13	7.0	11	3.6

Table 4: Cross-analysis of Q3, Q4, and Q5 (Survey 1)

	Y-Y	Y-N	N-N	No answer
Student is okay	4 (40.0%)	63 (67.0%)	53 (67.1%)	1 (50.0%)
Prefer teacher	4 (40.0%)	23 (24.5%)	21 (26.6%)	0 (0%)
Both	1 (10.0%)	2 (2.1%)	0 (0%)	0 (0%)
No answer	1 (10.0%)	6 (6.4%)	5 (6.3%)	1 (50.0%)
Total	10 (100.0%)	94 (100.0%)	79 (100.0%)	2 (100.0%)

Table 5: Cross-analysis of Q3, Q4, and Q5 (Survey 2)

	Y-Y	Y-N	N-N	No answer
Student is okay	7 (58.3%)	96 (64.0%)	95 (66.4%)	0 (0%)
Prefer teacher	5 (41.7 %)	49 (32.7%)	41 (28.7%)	0 (0%)
Both	0 (0%)	1 (0.7%)	1 (0.7%)	0 (0%)
No answer	0 (0%)	4 (2.7%)	6 (4.2%)	1 (100.0%)
Total	12 (100.0%)	150 (100.0%)	143 (100.0%)	1 (100.0%)

Table 6: Q6 “When do you wish the room to be open?”

	Survey 1	%	Survey 2	%
Before class	30	16.2	51	16.7
In morning	36	19.5	68	22.2
In afternoon	122	65.9	153	50.0
After period 5	30	16.2	86	28.1
No answer	7	3.8	15	4.9

The students with lower awareness of the ESHR (students answering Y-N or N-N) were more receptive to the idea of being helped by teaching assistances. The students who had actually visited the ESHR were equally receptive to either option (TA or full professor).

About half of the participants answered they wished the room open in the afternoon. After the 5th period, when most of the classes are over, is another time slot they like.

Table 7: Q7 “How often do you wish the room to be open?”

	Survey 1	%	Survey 2	%
Everyday	46	24.9	94	31.7
4 days a week	46	24.9	73	23.9
2 days a week	84	45.4	124	40.5
No answer	10	5.4	17	5.6

Then how often should it be open? More than 40% of the students answered to have it twice a week. It may have some influence from their schedule of English classes. They have two English communication classes a week.

Table 8: Q8 “Do we need to change the location of the room?”

	Survey 1	%	Survey 2	%
No change	150	81.1	259	84.6
Better change	12	6.5	19	6.2
No answer	24	13.0	28	9.2

More than 80% of the participants did not think we needed to change the location of the room. It seems that the room is located the place convenient enough for the students.

The last question concerns about what they wish to talk about in the room. There are three choices: about lessons, about tests, and about English in general.

Table 9: Q9 “What would you like to talk about if you visit the ESHR?”

	Survey 1	%	Survey 2	%
About lessons	76	41.1	133	43.5
About tests	67	36.2	95	31.0
About English in general	81	43.8	120	39.2
No answer	15	8.1	21	6.9

The students do not seem to know what they wish to talk about yet. Interestingly

one third of the participants showed their interests in tests, such as TOEIC® , TOEFL® , and STEP test. There might be a possibility of having these test classes or lectures as a part of this room's function.

Through these surveys, Survey 1 and Survey 2, it is seen that the students are generally indifferent to use the room and believe they do not need to use the room because they are doing fine in class.

② Teacher Survey Project

The teacher survey was conducted when the half of the spring semester of 2009 had past. We chose the time when midterm examinations had done and every instructor had grasped their students' progress.

Two versions of the survey were prepared: in English and in Japanese (Appendix B & C). There were five native teachers and four non-native teachers assigned the first year English communication classes. Seven out of nine teachers returned the survey paper.

The questions are made based on the student survey. Five out of seven teachers did not know about the room. Other two teachers knew about the room and had recommended their students to use the room, but they did not know either if the students went there or if the visits were helpful.

About having students as teaching assistants, five out of seven teachers agreed. As reasons, they said "The more people to help out, the better (native speaker)," and "It would be a good experience (native speaker)." They found this system would be useful for both students who need help and students who give help.

Q4, Q5 and Q6 are about the hours, days, and location of the room. Three of the teachers think afternoon is a good time to open the room, and one teacher mentioned opening in lunch time. Three teachers answered Q5, asking how often it should be opened, and all of them found opening it everyday was beneficial for students. Two of them think the location is okay and three of them said "Anywhere they (students) want." One teacher recommended a corner of cafeteria.

About kind of assistance they think appropriate for the room, three participants chose classroom homework and two mentioned special homework. One of them named "help in reviewing English" would be beneficial and three chose basic skills to be treated in the room. It seems that some teachers feel the students need to acquire basic skills.

The last question is about the language skills they expected the room to focus on. Five of the teachers think reading, speaking, and writing are to be focused on. Three chose listening as a focused skill. If the participants think students did not have basic skills in

English, any skills can receive benefits from extra hours spent in the room.

③ Kibler-project

Familiarity is a powerful force which can be seen as a two edged sword in that while being overly familiar lead to jadedness or contempt, a lack of familiarity can lead to insular behavior and a poor communication. When lack a familiarity is a root cause of standoffish behavior, simple ice breaking can go a long way towards getting people more involved and making activities more appealing. In fact, this concept is what inspired one of the highly successful Madison Avenue advertising campaigns, the 1971 Alka-Seltzer commercials that made the phrase "Try it, you'll like it" a part of American vernacular expression.

After the first student survey it was clear that familiarity was an issue for the ESHR. With that thought in mind the Kibler -Project was designed to facilitate student interaction with the ESHR. This was done by having teachers recruit students to participate in a Learning Styles survey (Appendix D) that was conducted by the instructor of the ESHR. Students who chose to participate were given extra credit in their respective classes for visiting the ESHR and completing the survey.

Upon completion of the visit the student were asked to complete an after-visitation survey (Appendix E) to assess their impressions of and interest in the ESHR upon having made the visit and meet the instructor. It was the intent of the authors to have students make one-on-one visits to the ESHR at a time of their choosing. In fact they tended to go in groups during the lunchtime visitation period. This unforeseen development did not defeat the purpose of the project, and it could be said that it throws some further light on student attitudes towards the ESHR. This project provided good insights into students' needs and the potential for promoting the ESHR via ice-breaking activities

Table 10: Average scores of consultation questionnaire (n=13)

Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10	Q11	Q12	Q13
2.8	1.9	2.2	2.5	2.2	2.1	3.0	3.0	2.8	1.8	2.8	2.7	2.8

We prepared a questionnaire for the consultation. The instructor is asked to talk to the students and check their answers. There are three sections: (1) Study Style, (2) Self Regulation, and (3) Self Image. Altogether there are thirteen questions. Each question has Rykert-type scale from "Agree" to "Disagree." The answers can be marked from 3 points (agree) to 1 point (disagree). The average scores of each question are in Table 10.

From Q1 to Q4 are about Study Style. They prefer study alone to study with students. They may learn better when they are assigned tasks and projects than through memorization.

From Q5 to Q8 the questions that are asking about their perception of their preparation for class and learning English. It seems that they are not preparing for class either in junior and senior high school or in college. They strongly agree that if they study hard they eventually become good at English and for getting there they need to acquire good learning habits.

Questions 9 through 13 are about their self image in learning English. They know English is important for them. Why? They might use it in the future. But at the same time they feel English is difficult and they are not good at English, and one of the reasons why they feel so is they met a different kind of English in college than they have learned in junior and senior high school. All of the students who answered this questionnaire are from the native speakers' classes. Does that mean the students had not learned in communicative approach though Ministry of Education, Science, Sports, and Culture has promoted it so strongly?

After they visited the room and talked with the instructor, the students were asked some questions about their visits. The questions were prepared beforehand (Appendix E).

Eleven students answered the after-visitation survey. The first two questions are about the accessibility of the room. Ten students found the room easily. Three students said the schedule of the room was not very convenient.

Second section is about their affective reaction to the visits. They were not very nervous about the visits and after their visits they felt accomplishment. Since the visits were for talking not for assignment, they might feel relaxed.

The last question is asking if they would go there again. Ten out of eleven students answered yes. Their comments are positive about the room. The comments are "I didn't know about this room, but I would use it in the future," "The instructor is nice and I feel relaxed to go there," "I would like to go there again because the instructor was kind," and "It was good to find this room."

④ Mashiyama-project

In this project, two participants were asked to visit the room. The selection was based on the scores on the midterm examination and the average scores of five vocabulary quizzes. It seemed that these students had not acquired study habits yet. They agreed to visit the room.

The procedure is as following: (1) give student an assignment sheet (Appendix F) to indicate what to do in the room, (2) student visits the room and hand the sheet to the instructor there, (3) student works on the assignment with the instructor, (4) the instructor writes how long and on which section of the book they worked on the assignment sheet, and (5) student brings back the sheet to the classroom teacher. This project was conducted between June 23rd and July 23rd, 2009.

Both of the students visited the room twice for 20 to 30 minutes. The given assignment was to go over one lesson from a book. The book has several English sentences in a lesson. They went over the meanings of those sentences and read aloud them.

At the end of the semester, the students were asked about their visits of the room (Appendix E). The questions are divided into three sections: (1) accessibility, (2) their feeling change, and (3) possibility of future visits. Both of them found the room easily, but they thought it was rather difficult to find the best time to visit there. Both of them said they had to visit twice to meet the instructor. Before their visits, one of them felt his visit rather stressful, but after their visits both of them reported that they had achieved something. Both of them would visit the room in the future, but one of them thought they need special assignment for the visit and more slots to see the instructor.

As a result, sending students to the room with assignment would promote future use of the room. Two points to consider must be the assignment and the availability. The assignment should give the visitors feeling of accomplishment. About the availability, both of them had to visit the room more than once to meet the instructor. If we could increase the available slots, it would be easier to visit the room.

⑤ Interview

The interview with the instructor of the ESHR was conducted on August 5, 2009. This interview was digitally recorded and analyzed. It was especially helpful in formulating an overall picture of the recent history and development of the ESHR, as well as gaining insights into various possibilities for improvement and extension.

Analyzing the interview thematically, there are three issues became visible: (1) Space, (2) Time, and (3) Task. These issues are the main concerns for the authors too and included in the surveys.

The authors were concerned if the students can find the ESHR easily but another problem appeared in the interview. The instructor of the ESHR was very clear about his feelings that it is difficult to work with students there when other teachers are present. In the assignment given in the Mashiyama project, reading aloud and listening to the CD were

necessary. He feels that it is disruptive and intimidating. He expressed the desire to have a separate space available for such work.

Availability (scheduling) is an issue. In the schedules of the fall semester of 2008 and the spring semester of 2009 (Appendix G) the instructor is available to teach from one to three days a week. The instructor of the ESHR thought just before or just after class would be the best time for students, but since those times are not available lunch time should be the best time. But the reality would seem to be that very few students are taking advantage of this time slot.

Then what kind of assignments would be suitable for the ESHR? As seen before, the instructor showed reluctance to share the room with other subjects' instructors when he instructs the students. He told about the assignment given in the Mashiyama project, "Reading together is okay, but having them (students) pronounce the words was difficult. That kind of activity is good (for students), reading aloud is necessary, but ... it was difficult." He mentioned supporting for test preparation as the best assignment for him to perform. "For example, when students want to take TOEIC ® or TOEFL ®, they can come here, like one of the students you know. He (the student) wanted to take STEP test, and we used the exercise books you left here... That was good... Those students are motivated, but I don't think many students know about it (test preparation support service)" he said.

These three issues, space, time, and task will be discussed in the next section again.

4. Discussion

The ESHR can be effective. But the question is; 'Why don't the students use it?' The biggest reason is the ESHR's low profile. Moreover, even if students know about the room, they choose not to go there. They think that they do not need to go there. In other words, their awareness of the ESHR is low both in terms of its meaning and its utilization. To solve this problem, adding to advertisement having seminars can be helpful. Or we can make it more accessible.

To apply solutions to the reality, there is a vital problem: the ESHR is run with only volunteer staff. This fact limits the usage of the ESHR. The instructor of the ESHR seemed to express to do more and extend his role in the ESHR, but at the same time showed hesitance to embracing plans or concepts that would prove to be work-intensive or highly structured. It is very likely that the demands of such participation are not in balance with the highly unrewarded, volunteer aspects of being a retired teacher who is working part-time and assuming the responsibilities for the ESHR. The influence of this problem spreads mainly to three areas: space, time, and task.

The location of the ESHR is quite accessible according to the student surveys. But as a space to learn English, the room is not ideal. As the instructor of the ESHR pointed out in learning English reading aloud and shadowing are very popular activities. Making English sounds is an essential part of mastering English but it might be annoying to other people studying if the room is shared. That is the difference between learning English and other subjects. It also becomes a source of embarrassment for the students visiting the ESHR and might lower their motivation to re-visit there. For both agents, learner and teacher, having shared room for English learning is not profitable at all. We strongly recommend at least to have a space more suitable for active instruction, such as reading aloud, listening comprehension and open discussion.

Having only volunteer as a teaching staff affects another type of accessibility: time. The schedule of the instructor of the ESHR is not a perfect fit. About half of the students expressed their preference of the ESHR being open in the afternoon. Probably because about half of the students participated in the survey had English classes in the afternoon (51.4% in Survey 1 & 50.7% in Survey 2). They also said that they wanted it open twice a week, as their English Communication classes. They might think visiting the ESHR right before or after their English Communication classes. In the after-visiting survey, some students found it slightly problematical. English teachers believed accessibility should be high and agreed having the ESHR open everyday in the teacher survey. The instructor is available mainly lunch time three times a week. But he expressed that the best time for him to teach in the ESHR is between 12:50 and 1:10. It is not his responsibility to stay in the ESHR and teach students. As long as it is a volunteer work, we cannot add the time slots for visitation more than regular contract for working part-time. To increase the availability, the authors recommend having teaching assistants in the ESHR. The detailed proposal will be seen in the next section.

The students want to talk about lessons (41.1% in Survey 1 & 43.5% in Survey 2) and English in general (43.8% in Survey 1 & 39.2% in Survey 2). The English teachers think giving classroom homework (3 out of 7 teachers) and special assignments (2 out of 7 teachers) to students to bring in the ESHR is effective. Moreover, they feel their students need to review (1 out of 7 teachers) and practice basic skills in English (3 out of 7 teachers).

In this project, two kinds of assignment were employed. In the Kibler project, the students were asked several questions about learning English. This task seems to be effective as an ice breaker. Most of the students who answered the after-visitation survey expressed possibility of future visit of the ESHR. If students are physically there, they appreciate its purpose and its value. This consultation project can be developed as an orientation session for the first year students.

In the Mashiyama project, a special assignment using an English textbook was used. The instructor of the ESHR mentioned this kind of activities, such as reading aloud, listening comprehension, and checking the meaning of the sentences are effective in learning English. If we can have special assignments for this room, it will increase students' exposure to English and the possibility of their success might be improved.

Aside these two kinds of assignments, the instructor of the ESHR proposed supporting students preparing for taking tests. About one third of the participants in the student surveys recognized the need of this kind of support, namely 36.2% in Survey 1 and 31.0% in Survey 2. Test preparation support may be another service the ESHR can offer.

The first two kinds of assignment, a consultation task and an assignment to improve English skills are helpful to invite future visitations. The third type of assignment may be practical application of support we can offer. All of them should be well prepared when they are employed, and we need support from all English teachers, regardless of working part-time or full-time.

5. Conclusion

The fundamental problem of the ESHR is having only volunteer staff to run the room. This problem causes from an uninviting teaching environment of the room, a shortage of teaching staff, to narrowing the time slots to access. One way to reduce the burden of the volunteer instructor is linking the ESHR and teaching practicum.

Generally speaking, taking teaching classes in college is not very highly appreciated by in-service teachers in Japan (Mashiyama, 2004). One of the reasons is that those classes were unpractical. Of course the situations of teacher training courses in college are improving, but until they visit a school in teaching practicum, most of the students who are taking the teacher training courses still do not have enough teaching experiences. If we can utilize the ESHR to offer those pre-service teachers teaching practice, that would be favorable for both. It can be connected to teaching methodology courses too. The pre-service teachers can give sessions to teach other students using selected techniques.

Another way of utilization of the ESHR is including the visitation to the room into the orientation of English Communication for the first year students. In the first hour of English Communication in April, all classes held in the same time slot have the general orientation to introduce facilities in school, such as the library, computer rooms, and the ESHR. The students who answered the questions about learning English in the Kibler project felt what they learned in junior and senior high schools and what they are learning in class in college were different. First year students need to know what to be expected in college. This

orientation should be a good introduction for them.

One of the thoughts the authors carried away is that never has the ESHR been so well equipped and well managed as it is now. But it still seems to be suffering from a lack of definition, and strategy. Furthermore, the retired teachers who are there now will be leaving in the next few years, and at the present time there seems to be no one to take their place. In considering the future of the ESHR it seems obvious that it is still in a highly evolutionary stage, and as such will have to continue to make many more adaptations if it is to survive and become a meaningful part of the overall school system.

References

Mashiyama, Midori (2004), *Japanese English Teachers' Experiences of Learning and Teaching English: A Phenomenological Case Study*. Unpublished doctoral dissertation, State University of New York at Buffalo.

(Received: September 1, 2009; Accepted: October 12, 2009)

Appendix A: Student Survey

学習支援室をより使いやすくするために皆様のご意見を伺いたいと思います。ご協力をよろしくお願いします。

当てはまるところを丸で囲んでください。

- (1) 9A 生 / 8A 生 / 7A 生 / 6A 生 / 5A 生以上 / その他
- (2) WA / WK / CL / CO / CS
- (3) 学習支援室があることを (知っている。 / 知らない。)
- (4) 学習支援室を利用したことが (ある。 / ない。)

(4) で「ある」と答えた方,

i) 何回ぐらい、利用しましたか。()

ii) 何をしましたか。 _____

iii) 役に立ちましたか。 _____

(4) で「ない」と答えた方,

i) どうしてですか。 _____

(5) 教えてくれる人は (先生でなくてはいやだ。学生でもよい。)

(6) 開いてほしい時間帯は? (授業前 / 午前中 / 午後 / 5 時限目以降)

(7) 開いてほしい曜日は? (毎日 / 週に 4 日程度 / 週に二日程度)

(8) 場所は? (今のまま N205 / 変えた方がよい < 例えば _____ >)

(9) 何を聞きたいですか? (授業のこと / 資格試験のこと / 英語一般)

Appendix B: Teacher Survey (in English)

2009 English Study Help Room Questionnaire

Please take a few minutes to answer this questionnaire about the English Study Help Room.

- 1) (I knew / I did not know) there was an English Study Help Room.
- 2) (I have / I have not) recommended my students to use the English Study Help Room.

If you answered 'Yes' to number two:

- i) I think my students (have / have not) used the English Study Help Room.
- ii) I (think / don't know) if the English Study Help Room is effective.
- iii) Did you recommend any specific type of approach to using the English Help

Study Room?

- 3) What do you think about having students who are enrolled in English Teacher Training classes work as assistants in the English Study Help Room? (I would agree. / I would not agree.)

Reasons _____

- 4) What times would you like to have the English Study Help Room made available to students?

(Just before class / In the morning / In the afternoon / From 5th period on)

- 5) What days would you like to have the English Study Help Room made available to students?

(Everyday / Monday / Tuesday / Wednesday / Thursday / Friday / Other _____)

- 6) What location would you recommended for the English Help Room?

(N205 - Current Location / Another location : ex_____)

- 7) What type of assistance would most like to see offered at the English Study Help Room?

(Basic Skills / Preparation for Class / Help in reviewing English / Classroom Homework /

Special Assignments / Assistance for English Testing - TOEIC, TOFEL, Eiken, etc - /

Other _____)

- 8) What languages skills do you think the English Study Help Room should focus on?

(Reading / Listening / Speaking / Writing / other _____)

Appendix C: Teacher Survey (in Japanese)

学習支援室 (N205) をより使いやすくするために皆様のご意見をお聞かせください。

(1) 2009年度に教えたクラスは (リーディング/リスニング)
(WA/WK/CL/CO/CS) (9A生/8A生/7A生/6A生/5A生以上/その他)

(2) 学習支援室があることを (知っている・知らない)。

(3) 学生に学習支援室を利用するようすすめたことが (ある・ない)・

(3) で「ある」と答えた方:

i) 学生は学習支援室を利用 (した・しなかった) (と思う)。

ii) 学習支援室の利用は効果が (あったと思う・なかったと思う・わからない)。

iii) 学習支援室では特に何をするようにすすめましたか。

(4) 英語教育課程を履修している学生にお手伝いをしてもらおうことを考えています。

導入に (賛成だ・反対だ)。

(5) 開いてほしい時間帯は? (授業前/午前中/午後/5時限目以降/その他____)

(7) 開いてほしい曜日は? (毎日/月/火/水/木/金/その他_____)

(8) 学習支援室の場所は? (今のままN205/変えた方がよい・例えば_____)

(9) 学習支援室の機能として必要なのは?

(基礎力をつける/授業の予習・復習などの補助/授業の課題/特別な課題/資格試験の補助/その他_____)

(10) どのスキルに学習支援室の補助が必要だと思いますか。

(リーディング/リスニング/スピーキング/ライティング/その他_____)

Appendix D: Learning Styles survey in the Kibler Project

<学習のスタイル>

1) 一人で勉強するほうが好きだ。

その通り _____ どちらでもない _____ 全然違う _____

2) グループで勉強するのが好きだ。

その通り _____ どちらでもない _____ 全然違う _____

3) ものを覚えるのは得意だ。

その通り _____ どちらでもない _____ 全然違う _____

4) 課題やプロジェクトから学ぶことが多い。

その通り _____ どちらでもない _____ 全然違う _____

<学習の習慣>

5) 中学と高校の時はもっと英語の勉強をした。

その通り _____ どちらでもない _____ 全然違う _____

6) 大学では英語の勉強をよくするようになった。

その通り _____ どちらでもない _____ 全然違う _____

7) 英語はできる限り毎日勉強する方がよい。

その通り _____ どちらでもない _____ 全然違う _____

8) 英語は頑張ればできるようになると思う。

その通り _____ どちらでもない _____ 全然違う _____

<自分にとって英語とは:>

9) 英語は私にとってとても大切な科目である。

その通り _____ どちらでもない _____ 全然違う _____

10) 中学と高校の授業のおかげで大学の授業についていける。

その通り _____ どちらでもない _____ 全然違う _____

11) 将来、英語を仕事や趣味で使えるようになると思う。

その通り _____ どちらでもない _____ 全然違う _____

12) 英語の勉強はとても難しい。

その通り _____ どちらでもない _____ 全然違う _____

13) 英語は上手ではないと思う。

その通り _____ どちらでもない _____ 全然違う _____

Appendix E: After-visitation Survey

利用回数：() 回

目的： アンケート / 課題の学習

(1) 学習相談室は行きやすかったですか。

場所はすぐに分かりましたか。

すぐに分かった	分かりにくかった

時間は？

都合がよかった	なかなか合わない

(2) 学習相談室に行くことはどうでしたか。

行く前は：

こわかった (その他：	気にならなかった)

行った後は：

達成感があった (その他：	もう行きたくない)

(3) また学習相談室を利用すると思いますか。

する	しない

「しない」と答えた方：

何が必要だと思いますか。

(先生を増やす・時間を増やす・ボーナスポイント・特別な課題・その他)

Appendix F: Assignment Sheet in the Mashiyama Project

学生の学習に関するお願い

〇〇先生

以下の学生に課題を持たせましたので、よろしくお願ひします。

2009年 12月 7日 増山

学籍番号：

名前：

課題

〇〇先生のコメント

来室日：

学習時間：

内容：

Appendix G: Schedule of the English Study Help Room

Fall, 2008

	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
Lunch time			Available		
3 rd period			Available		
4 th period			Available		

Spring, 2009

	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
Lunch time	Available	Available			Available
3 rd period	Available	Available			Available
4 th period		Available			Available

'09 年度フィールドワーク「中国伝統文化及び現代社会考察」の報告

Report on the Field Work: Study of Modern and Traditional Culture of China

張 雷¹

Lei Zhang²

キーワード：フィールドワーク，北京研修，社会考察，日中交流，文化体験

1. はじめに

2009年8月1日～8日まで、私は本学国際文化学部の教育方針の一つであるフィールドワークを実施するために国際コミュニケーション学科の学生5名を引率して北京を訪ね、中国の大学生と交流し、中国の伝統文化、世界遺産、名勝古跡を見学し、また現代化都市の北京を考察した。

今回の北京訪問および学生交流を通して、学生諸君が見たこと、触れたこと、習ったことおよび各自の感想、そして北京を見学・考察する理由および活動内容などについて報告したい。

2. 北京を見学・考察する理由

北京は中華人民共和国の首都として全国の政治、文化、科学、教育の中心であり、交通の中枢でもある。

北京には3,000年の歴史を有する古都として、数多くの名勝古跡と文物や旧跡が残されている。世界的に有名な万里の長城の要塞の地—八達嶺と居庸関は北京の西北部、バスで約1時間の距離にある。世界最大でもっとも完全な古代建築群からなる故宮（紫禁城）は北京市内の中心にあり、明代（1368年～1644年）、清代（1644年～1911年）の両王朝の24人の皇帝はここで政務を勤め、ここに居住していた。西の郊外にある頤和園は帝王の離宮、庭園であり、園内は山紫水明、殿閣亭台がそびえ、回廊がめぐり、園林芸術の傑作と言われている。市内の北海、景山、天壇、地壇、庸和宮などの建築は中国文化史、建築史および園芸史において、極めて重要な地位を占めている。

北京は、中国の窓口であり、改革・開放政策が実施されてから、北京も大きな変貌を見せ、約1,500万人の人口を擁するモダンな大都会になった。北京は「最も古く、最も新しい世界の大都市」と言える。北京は、何度行ってもそのたびにいつも新鮮な驚きと感動を与えてくれる魅力に満ちた発展途上の大都市である。

また、北京は、中国食文化を体験する最も良い場所である。北京には全国各地の名料理店が集中し、山東料理、四川料理、江蘇料理、浙江料理、広東料理、湖南料理、福建料理、安徽料理と言われる八大料理および北京料理、上海料理、東北料理、天津料理、客家料理、薬膳料理、精進料理、宮廷料理などの1万種類以上の料理と軽食を味わうことができる。北京の伝統的な住宅—「四合院」や安らいだ雰囲気包まれた「胡同」及び朝の太極拳、夜の「大秧歌」などすべて魅力が溢れている。これら

¹ 東海大学国際文化学部国際コミュニケーション学科，005-8601 札幌市南区南沢5条1丁目1-1

² Department of International Communications, School of International Cultural Relation, Tokai University, 5-1-1-1 Minamisawa, Minami-ku, Sapporo 005-8601, Japan

が学生を率いて北京を見学・考察する理由である。

3. 北京滞在

①主な見学・考察の内容

- 8月1日(土) 千歳空港発 北京到着 ホテル宿泊 夜四川料理賞味
- 8月2日(日) 天安門広場, 故宮博物院, 北海公園, 団城, 夜北京ダック賞味
- 8月3日(月) 世界遺産頤和園, 仏香閣, 長廊, 銅亭, 十七孔橋, 文昌院, 夜東北料理
- 8月4日(火) 万里の長城, 好漢坡, 中国の大学生と交流, 夜広東料理賞味
- 8月5日(水) 日中戦争勃発地の廬溝橋と宛平城見学, 戦争から思考, 体育会場鳥の巣
- 8月6日(木) 世界遺産天壇公園, テレビ塔, 市内考察, 夜北京料理賞味
- 8月7日(金) 中国の大学生と交流, 繁華街見物, 買い物, 帰国の準備, 記念写真撮り
- 8月8日(土) 北京空港発 千歳到着 教学部長の平木先生が千歳空港迎え, 解散

②北京での滞在先

北京如家酒店小西天ホテル

各部屋には, テレビ・クーラー・電話・お湯・トイレ・シャワー, 飲料水完備

③中国伝統文化及び現代社会の考察の参加者

里見(会計)

宇藤

谷村(班長)

清水

小笠原

引率教員 張雷

4. 北京見学・考察を通じて見たこと, 触れたこと, 習ったこと

①天安門

天安門は, 明の永楽15年(1417年)に建てられた。高さは33.7メートルで, 当時は「承天門」と呼ばれていたが, 清の順治8年(1651年)に改築され, 「天安門」と改めた。天安門には五つの通路があり, 皇帝は中央の門から出入りした。明, 清の時代, 皇帝の詔書を発する儀式がこの天安門で行われた。天安門の前に五つの白大理石の橋は「金水橋」と呼ばれ, 彫刻がとても美しい。

天安門の屋根には, 11の吉祥があり, それぞれ竜, 鳳凰, 獅子, 天馬, 海馬, 獬豸, 押魚, 孟昶, 斗牛, 行什と鳳凰に乗る仙人である。竜, 鳳, 天馬, 海馬は吉祥の象徴で, 獬豸, 孟昶, 沸徨は正義の猛獣のシンボルで, 斗牛鎮火の神獣, 行什は神猿で悪鬼を退治し, 宮殿を守ることができると古代中国人は信じていた。

②天安門広場

天安門広場は面積44万㎡で, 南北の長さは800メートル以上, 東西の幅は500メートル以上で, 地球上の最大の広場で, 50万人もの集会ができる広場となった(図1)。

天安門広場の東側に中国歴史博物館と中国革命博物館があり, 西側に人民大会堂(日本の国会議事堂に当たる)があり, 天安門の正対面には人民英雄記念碑があり, その裏には毛主席記念堂がある。

毛沢東の遺体は水晶の柩に安置されている。

③故宮

故宮は昔「紫禁城」と呼ばれ、世界に現存する規模の最も大きい、最も完全に保存されている帝王の宮殿である。故宮は北京の中央に位置し、敷地面積は72万㎡で、南北の奥行は960メートル、東西の横幅は750メートルの長方形の城である。周囲は高さ10メートルの城壁で囲まれ、城壁の外側には幅52メートルの堀があり、城内には部屋数は9999.5あり、建築面積は16万㎡ある。故宮は主に「前朝」と「内廷」に分かれている。「前朝」は金箔に輝く「太和殿」、「中和殿」、「保和殿」という三大宮殿を中心として、「文華殿」と「武英殿」が両側に立っており、主に皇帝が厳かな式典を行い、権力を示す場所である。「内廷」は「乾清宮」、「交泰殿」、「坤寧宮」、「御花園」を中心として、両側に東西六宮などの宮殿と「養心殿」、「太極殿」、「宝華殿」、「奉先殿」、「皇極殿」、「養性殿」など数多くの宮殿が立ち並んでいる。皇帝と皇后、妃、王子、公主たちの日常生活の場所である。故宮は明の永楽4年(1406年)に工事にかかり、永楽18年(1420年)に出来上がり、14年間を費やして、1万人の職人と100万人の労力を使い、築きあげた。明、清両代の皇居として、前後24人の皇帝がここに住んでいた。現在105万にのぼる貴重文物と国宝が保存されているので、いま「故宮博物院」と名付け、世界の観光客を迎えている。



図1 天安門広場



図2 万里の長城

④頤和園

頤和園は中国に現存する規模の最も大きい、最も完全に保存されている皇帝の庭園の一つである。ここはかつて清朝皇帝の避暑離宮であった。頤和園は万寿山と昆明湖とで構成され、総面積は290万㎡で、湖の面積は全体の3/4を占めている。頤和園はすでに800余年の歴史を持っている。1153年、金の時代に皇帝がここに行宮を作らせた。金から清まで数百年の年月の中に、3,000余りの殿堂亭閣が建てられた。その中に、仏香閣、諧趣園、仁寿殿、銅亭、石舫、知春亭、智恵海、徳和園、宜雲館、玉瀾堂、排雲殿、景福閣、画中遊、聴驪館、扇面殿、養雲軒、写秋軒、円朗斎、雲雪巢、文昌院、多宝塔などが散在し、観光客を魅了した。とくに頤和園の東の邀月門から西の石丈亭まで、長さ728メートルの長廊には梁などの所に色彩画が描かれてあり、大小約1万4000枚に達していて、これは全部中国歴史の物語や美しい南の杭州の西湖風景であり、数多くの色彩画の中には、同じものはない。

昆明湖には、柳橋、幽風橋、玉帯橋、鏡橋、練橋、界湖橋などの橋がそれぞれの形で島をつなげて

いて、その中に長さ 150 メートルの十七孔橋が虹のように青い波の上に跨っている。橋の手すりには大小 544 匹の獅子が浮き彫りされている。島には竜王廟などたくさんの古風な建築がある。

⑤天壇公園

中国のシンポルの一つ天壇公園は明・清朝を通じて、皇帝が五穀豊穡と降雨を天の神様に祈ったところである。明の時代 1420 年に建てられ、最初は「天地壇」と名付けられた。のちに清の乾隆帝の時代に改築され現在見られるような形となった。中には祈年殿、皇穹宇、圜丘壇、回音壁、三音石、祈谷壇、皇乾殿、丹陛橋、神樂署、長廊、齋宮などがある。北京には、故宮を中心として東に日壇、西に月壇、南に天壇、北に地壇があり、それぞれの太陽の神様、月の神様、地の神様が祭られ、天壇では、天の神様が祭られている。圜丘は天の神様に祈るところである。皇帝は毎年冬至にここで「三跪九叩」して天に祈った。天壇公園の面積は 273 万平方メートルで、敷き内には、樹齢 300 年から 600 年の古樹は 2,600 本もある。



図3 東安商場の茶室



図4 鳥の巣

⑥万里の長城

世界的に有名な長城は中国古代文明の象徴であり、戦国時代（紀元前5世紀）から作り始められ、すでに 2,500 年の歴史を持っている。斉国が一番早く長城を作った国である。その後、各国は相互防衛のため、それぞれの国境線に城壁を築いた。また、秦、燕、趙三国は北部の強い騎馬民族の匈奴の侵入を防ぐため、それぞれ自国の北部に長い城壁を作った。紀元前 221 年、中国を再統一した秦の始皇帝は秦、燕、趙などが建てられた長い城壁をつなぎ合わせ、拡大し、十数年間を費やして、長さ 6,350 キロメートルの長城が完成した。（2009 年 4 月、中国に発表された最新の調査結果によると、長城の総延長は 8,851.8 キロメートルになった）。明朝以前の長城は黄土、石材で作られていたが明朝では石とレンガで土壁を覆ったのである。

万里の長城は西の甘粛省の嘉峪関から東へ延々と伸びて、山海関まで全長 1 万 2,700 里（里は中国の長さ単位で、1 里=0.5 キロメートル）で、故に万里の長城と称されていた（図 2）。

⑦盧溝橋

盧溝橋は石橋として北京の西南から 20 キロメートル離れている永定河にある。金の時代明昌三年 1192 年に作られ、800 年の歴史を持っていた。盧溝橋は孔橋として十一の孔があり、全長は 266.5 メートルで、幅は 7.5 メートルである。橋の両端にそれぞれ華表一対あり、石の欄干に刻まれた表情各違の精巧な獅子が 501 体あり、橋の東側に乾隆帝が自ら書いた“盧溝曉月”という石碑がある。盧溝曉月も

著名の燕京八景の一つである。橋はとても綺麗で、中国橋の建築史上の傑作の一つであり、マコ・ポロはかつて“この橋は世界で一番美しく、唯一無二のものだ”と称賛したそうである。

廬溝橋も日中戦争勃発地でもある。1937年7月7日、夜十時、日本軍と中国軍の武力衝突が起こり、ついに全面戦争が勃発した。その後、中国共産党軍と国民党軍は統一戦線が結成し、全国規模の抗戦が始まり、8年間の日中戦争が続いた。我々は今日廬溝橋を訪問し、日中両国共に深刻な災難をもたらした60年前の戦争に思いをはせ、平和を願った。

⑧宛平城

宛平城は廬溝橋の東側にあり、大昔は小さい町であったが1640年に作られ、北京の護衛城として“拱北城”と名付けられ、清の時代に“拱極城”と改称し、その後、国民時代に宛平城と呼ばれていた。《日下旧聞考》によると、この町はかなり賑やかな町であった。残念ながらこの商売繁盛、平和無事の宛平城は日中戦争の“七・七事変”の主戦場になった。いま現在、宛平城の城壁に日本軍の攻撃大砲の弾跡もたくさん残されている。

なお、これらの史跡に関する詳しい記述は、文献(北京百科全書編集委員会(1990), 高占祥, 他(1994))を参照してほしい。

5. フィールドワーク参加者の一言感想

里見:

今回の中国でのフィールドワークでは、本当に沢山の発見がありました。故宫博物院に始まり、世界遺産の万里の長城や頤和園等、様々な場所を一部でもこの目で見る事が出来て、感動しました。また、同時に歴史の重みを感じました。

同じぐらい印象に残っているのは街中の風景です。テーマパーク内では、あらゆる場所でアイスキャンディーを売る人や凍らせた水を売る人、玩具を売る人が沢山いました。余程暑いのか、シャツを胸の下あたりまで巻き上げて歩いているおじさんが目立っていたり、女性が持っている派手目な日傘がキラキラと眩しかったり……。流行っているのかどうかは分かりませんでした。赤信号でも横断出来てしまう場面があったり、車道の真ん中で車をやり過ごしながらも平然としている姿は、日本では見られないものでした。

8日間通してずっと思っていたことは「ここは何で自由なところなんだろう」。人々がのびのびしている様に思えました。本当に面白かったです。中国の大学三年生の甜甜と一緒に過ごせて、楽しい思い出が出来ました。またいつか一緒に「吹喇叭」がしたいです。甜甜, 多謝, 多謝!

宇藤:

今回のフィールドワークを通して自分は様々な事を経験することができ、本当に良かったと思います。

7泊8日という短い間ではありましたが、中国の生活や文化など、そういった普段体験することができないことを肌で感じ、学ぶことができ、自分にとってとてもプラスになったと思います。

また、中国の大学生とも交流をする機会を設けてもらい、色々話を聞くことができました。同じ年代ということもあり自分にとって良い刺激になったと感じます。そして馴れない中国語などでコミュニケーションをはかれたことは良い経験になったと思います。

今後、このフィールドワークを生かして様々なことに興味を持ち行動に移せたらと考えています。



図5 北京オリンピック主会場



図6 中国茶の賞味

谷村:

今回初めて中国を訪れて、日本とは異なる文化に触れることが出来ました。中国の世界遺産など様々な場所を見たり触れたりして、とてもよい経験をしました。中国の歴史の長さ、人口の多さや街や建造物の大きさなどを感じることもできました。しかし中国の良い点なども肌で感じることもでき、そのことを思うとまだ発展途中の国だと思いました。

中国の大学生とも交流でき、お互いにの国についてなど様々なことを話し合いました。

中国の食文化も体験し、いままで食べたことのないものなども食べたりしてとても良かったです。

フィールドワークを終えて、色々なことを体験したり、考えさせられたりし、とても良い体験が出来たと思います。

清水:

7日間、中国に滞在して文化の違いをすごく感じた。まず、交通ルールは日本では歩行者優先が基本だが、中国では車が優先で、信号が青で横断歩道を渡っていても、車は平気で横切り、クラクションを鳴らしてくる。食の方では、量が多く、安くて味も美味しかった。ただ、お皿がかけていたり、よごれていたり、衛生面が気になった。

中国には日本で見たことのない様な物や風景がたくさんあり、一週間では物足りないので機会があればまた行きたい。

小笠原:

7日間という短い期間でしたが、中国の様々な文化を体験することができました。万里の長城や天安門広場などの世界遺産やテレビ塔や鳥の巣などの観光スポットに行ったり、一般的なレストラン、スーパーに行ったことで多くのことを感じ、学ぶことができました(図3-6)。一番印象的だったのが、北京という街には近代的な建物や裕福な生活と、日本から見たらきたなく感じてしまう暮らしの両方が混ざっていると感じたことです。中心地の風景は札幌よりも立派に見えるくらいですが、少し移動するだけでゴミが散らばっている庶民的な生活が感じられました。このような貧富の格差が様々な場面で見ることができました。多くの問題をもっと学び、機会があればまた中国へ行き、もっと色々なことを発見したいと思います。

6. 終わりに

今回のフィールドワークー中国の伝統文化及び現代社会の考察, そして中国の大学生との交流を通して, 異文化, 異国の風俗, 習慣, 生活などを自ら体験したことは国際コミュニケーション学生諸君にとって本当にいい勉強になったと思う。

国際コミュニケーション学科の学生にとって, 教室での異文化の勉強と海外での異文化の体験を結合させていけば, 異文化ばかりでなく, 異国に対する理解は一層深くなるだろう。特に引率教員と一緒に行動し, 引率教員が案内してくれれば, 教材では教えられない様々な知識を身につけることもできるし, 安全の面では個人旅より集団の方が安心できるし, 経済の面でも一部の費用は節約できるようになる。

今回のフィールドワーク・北京見学・考察は楽しく, 面白く, 無事故, 無盗難, 無過失, 安全, 順調に終了させることができ, 協力してくれた日中両国のすべての関係者に心から感謝の意を表す。

参考文献

- 高占祥, 他 (1994), 『中国文化大百科全書』, 長春出版社, 長春市, pp. 80, 81, 84, 88, 92
北京百科全書編集委員会 (1990), 『北京百科全書』, オリジナル出版社, 北京市, pp. 19, 68, 160, 289, 414, 481

(受付: 2009年9月8日, 受理: 2009年10月9日)

東海大学高等教育研究（北海道キャンパス）編集委員会

編集委員長 四方 周輔

編集委員 泉 隆、岩崎 日出夫、沖野 慎二、増山 みどり

発行 2009年10月31日

発行者 東海大学札幌教養教育センター

〒005-8601 札幌市南区南沢5条1丁目1-1

電話 011-571-5111

Journal of Higher Education, Tokai University (Hokkaido Campus)

No.1 (2009)

Contents

Reports

Reading picture books to children by international students

–Aiming at the collaboration among the international students, the university, and the regional community–

Takako Ohyama • Hiromi Hashimoto . . . 1

An action on the drama where international exchange students and Japanese students perform in collaboration

–For Ibsen drama presentation –

Hiromi Hashimoto • Takako Ohyama . . . 8

A qualitative investigation and assessment of the status, trends and developmental potential of the English Study Help Room at Tokai University, Sapporo Campus

Midori Mashiyama • Ronald Kibler . . . 15

Report on the Field Work: Study of Modern and Traditional Culture of China

Lei Zhang . . . 36